

## 教職課程履修学生のいじめ状況認識 — 1998年・1999年調査

森住 宜司<sup>1)</sup>

### **Bully/Victim Problems and the Students of a Teaching Profession Course: Their Present View on Bullying Researched in 1998 and 1999.**

Takashi Morizumi<sup>1)</sup>

#### 要約：

本論文は、教職課程履修学生の、小・中・高校時代に経験したいじめ認知、加害・被害経験、現在のいじめの発生状況認識・今後の推移評価、いじめ報道に対する関心、情報への対応について1998・1999年に調査し、その結果を1997年調査結果と比較しながら検討したものである。1998・1999年調査においても1997年調査と同様に、学級内でのいじめ認知やいじめ加害も多くの学生が報告した。ただし、いじめ被害経験は1998年調査の小学校と中学2年で他の年の調査結果より多く、いじめ加害経験は1999年調査の小学校と中学1年で他の年の調査結果より多かった。1998年と1999年を合わせた分析結果では、いじめ発生の現状を約60%（1997年調査では70%弱）の学生が多いと認識し、40%弱の学生が今後増えると評価した。他は1997年調査とほぼ同じ結果であった。

キーワード：いじめ、教職課程、現状認知、加害・被害経験、推移評価

#### 1. はじめに

教職課程履修学生が、いじめ問題をどのように認識しているのか検討するために、森住(2004)<sup>[1]</sup>では、過去のいじめに係わる経験と現在のいじめ問題に対する関心とその問題の理解を調査した。本研究は、1997年の同調査を引き続き1998年および1999年に実施した結果を分析、検討するものである。1998年調査が対象とする主な学生は、1988年度が小学校5年、1990年度が中学校1年、1993年度が高校1年の学校生活を送っている。したがって、今回分析する1998年調査および1999年調査の対象学生は、1985年は小学校2、3年、1995年は高校3年、大学1年にあたる。その小学校後半は、学校でさまざまな「いじめ問題」対策がとられるなかで「いじめ減少傾向」が報道された時期で、高校3年を前後する1994年、1995年に再び「いじめ自

殺」が相次いで報道されたのである。その間の1990年代前半の中学時代はどのようなものであったのであろうか。事件報道から少し時間を置いたと思われる時期に、思春期の児童生徒として学校生活を送ったと考えられる学生、とりわけ教職課程履修学生のいじめ問題に対する認識を調査するのが本研究である。

#### 2. 教職課程履修学生の「いじめ」問題認識

##### 2.1 目的

本調査は、教職課程履修学生が「いじめ」状況をどう認知し理解しているかを検討するもので、ここでは1997年調査同様、「いじめ」を「精神的にまたは心身共に一方的に相手を痛めつけるような行動」<sup>[2]</sup>として調査し、それを1997年調査結果と比較検討する。

##### 2.2 方法

1998年調査では、国立T大学で教職課程科目「教

1) 浦和大学総合福祉学部

Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

Table 1 いじめ学級内認知、被害・加害経験の3年間(1997調査～)

1-1 いじめ学級内認知(1995年度入学生～1997年度入学生)

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
95年度女	69.2	44.2	38.5	25.0	9.6	%
96年女子	70.0	43.3	36.7	46.7	13.3	
97年女子	70.3	48.6	35.1	24.3	13.5	
95年度男	61.7	46.7	40.2	33.6	8.4	%
96年男子	58.8	33.8	42.6	35.3	8.8	
97年男子	66.2	43.7	39.4	36.6	14.1	
95年度計	64.2	45.9	39.6	30.8	8.8	%
96年男女	62.2	36.7	40.8	38.8	10.2	
97年男女	67.6	45.4	38.0	32.4	13.9	

『日本のいじめ』見聞経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
17.4	21.3	19.0	18.5	12.4	%

1-2 いじめ被害経験(1995年度入学生～1997年度入学生)

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
95年度女	26.9	7.7	5.8	3.8	0.0	%
96年女子	33.3	10.0	6.7	3.3	3.3	
97年女子	13.5	16.2	8.1	5.4	5.4	
95年度男	9.3	5.6	4.7	3.7	0.0	%
96年男子	22.1	8.8	11.8	2.9	0.0	
97年男子	9.9	1.4	1.4	1.4	0.0	
95年度計	15.1	6.3	5.0	3.8	0.0	%
96年男女	25.5	9.2	10.2	3.1	1.0	
97年男女	11.1	6.5	3.7	2.8	1.9	

『日本のいじめ』被害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
20.4	16.4	14.2	12.9	9.0	%

1-3 いじめ加害経験(1995年度入学生～1997年度入学生)

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
95年度女	30.8	9.6	5.8	3.8	0.0	%
96年女子	33.3	10.0	6.7	3.3	3.3	
97年女子	32.4	13.5	2.7	2.7	0.0	
95年度男	27.1	9.3	7.5	7.5	0.9	%
96年男子	22.1	8.8	11.8	2.9	0.0	
97年男子	38.0	21.1	15.5	11.3	5.6	
95年度計	28.3	9.4	6.9	6.3	0.6	%
96年男女	25.5	9.2	10.2	3.1	1.0	
97年男女	36.1	18.5	11.1	8.3	3.7	

『日本のいじめ』加害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
19.3	24.9	18.7	16.4	11.1	%

1-4 入学年度別・専攻別の被験者数(1995～1997年度)

	芸術系	体育系	理科系	その他	合 計
95年度女	10人	19人	12人	11人	52人
96年女子	17人	5人	4人	4人	30人
97年女子	13人	16人	5人	3人	37人
女子小計	40人	40人	21人	18人	119人
割 合	33.6	33.6	17.6	15.1	% (119人)

	芸術系	体育系	理科系	その他	合 計
95年度男	7人	78人	16人	6人	107人
96年男子	2人	57人	9人	0人	68人
97年男子	5人	63人	5人	0人	71人
男子小計	12人	198人	30人	6人	246人
割 合	4.9	80.5	12.2	2.4	% (246人)

	芸術系	体育系	理科系	その他	合 計
95年度計	17人	97人	28人	17人	159人
96年男女	19人	62人	13人	4人	98人
97年男女	18人	79人	10人	3人	108人
男女小計	54人	238人	51人	24人	365人
割 合	13.0	57.2	14.0	6.6	% (365人)

育相談」を受講する1996年度入学で主として第3学年在籍の男女学生に対して調査を実施した。調査日時は主なもの1998年8月下旬であった。1999年調査も1年ずれたかたちで同様に実施した。調査人数は1998年調査では98人(女子学生30人、男子学生68人)、1999年調査では、108人(女子学生37人、男子学生71人)であった。

調査項目は以下のとおりである。<sup>[3]</sup>

Q1「小・中・高時代に、学級内で『いじめ』があったか」

Q2「いじめがあった場合、その手段は？」

Q3「学級担任は解決のためにそれを取り上げたか」

Q4「担任は、どんな方法で対処し、解決したか」

Q5「『いじめ』発生の現状について」

Q6「今後の『いじめ』推移について」

Q7「『いじめ』問題報道への関心」

Q8「『いじめ』問題の報道・情報の受け止め方」

Q9「いじめに対する教師の対応の正誤」

2.3 結 果

Q1「小・中・高校時代の学級内での『いじめ』の認知」

1996年度入学および1997年度入学学生の学級内『いじめ』認知の割合等を1995年度入学生(1997年調査)のものと共に記したのがTable 1である。1997年実施の全国的社会学調査<sup>[4]</sup>結果を「『日本のいじめ』見聞経験」「『同』被害経験」「『同』加害経験」として合わせて記してある。Table 1-1は、1995年度入学生から1997年度入学生までの学級内での「いじめ」の認知率であるが、1995年度入学生とほぼ同様の認知率を1996年度入学生、1997年度入学生とも示していた。1996年度入学男子学生の中学1年時の認知率が約10%低い33.8%であったことと、また、1996年度入学女子学生の中学3年時の認知率が約20%高い46.7%であったことが他の年度と異なる点である。

Table 1-2およびTable 1-3は、いじめ被害といじめ加害の3年間の経験率であるが、まず、いじめ被害経験では1996年度男女入学生の小学校時代が相対的に多く、1997年度女子入学生の小学校時代が相対的に少なく、その中学1年時が多かったといえる。次にいじめ加害経験であるが、特に目立つのは1997年度男子入学生の他年度や女子学生と比較

しての多さであった。なお、Table 1-4は、調査対象者の在籍専攻別・取得科目別の割合であり、調査対象者の少なさや体育系学生が多いことは上記の結果および以下の結果を見ていくときにも考慮しなければならない。

次に Table 2であるが、これは1998年調査と1999年調査の対象者を合わせて（以下、兩年の調査結果を合わせた女子学生67人、男子学生139人、合計206人のデータ）、その学級内いじめ認知、およびいじめ被害経験と加害経験の割合を記したものである。まず、Table 2-1にある学級内のいじめ認知率であるが、中学1年41%、中学2年39%、中学3年35%で、これも1997年調査同様『日本のいじめ』調査の倍以上の認知率であった。男女差では、1997年調査と若干異なり中学3年ではほぼ同じで、逆に中学1年では女子学生の認知率の方が7%ほど高く中学2年では5%ほど低い結果であった。小学校についても7%ほど女子学生の認知率が高かったが、その数字は1997年調査の男女合計64%とほぼ同じ数字であった。

Table 2-2にあるいじめ被害経験は、中学校では『日本のいじめ』調査より低い数字となっている。中学生でいえば、9~14%に対して本教職課程履修学生は3~8%のいじめ被害経験というもので半分程度の結果であった。ただし、女子学生の小学校時代の被害経験率が男子学生の16%に比べて22%とやや高い数字であるが、男女計と『日本のいじめ』調査を比べるとほぼ同じ程度であった。それよりも女子学生の中学校1年時のいじめ被害経験は13.4%と男子や『日本のいじめ』調査よりも高い経験率であった。

また、Table 2-3にある加害経験率も、小学校の男女計は『日本のいじめ』調査より8%ほど高い数字であるが、その中学生の加害経験は11~19%に対して本調査の学生は6~14%の加害経験率で、これはやや少ない結果であった。教職課程履修学生はいじめ被害経験も加害経験も平均より少なかった可能性があるが、女子学生の小学校から中学校1年にかけては若干高いいじめ被害経験率が報告されていたことになる。

Table 2-6および Table 2-7は、いじめ経験を被害のみの場合、被害加害の場合と加害のみの場合についてまとめたものである。男女計を『日本のい

Table 2 1996・1997年度入学生のいじめ認知、被害・加害経験等

2-1 いじめ学級内認知（女子学生67人、男子学生139人）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	70.1	46.3	35.8	34.3	13.4	%
男子学生	62.6	38.8	41.0	36.0	11.5	%
男女合計	65.0	41.3	39.3	35.4	12.1	%

『日本のいじめ』見聞経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
17.4	21.3	19.0	18.5	12.4	%

2-2 いじめ被害経験（女子学生67人、男子学生139人）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	22.4	13.4	7.5	4.5	4.5	%
男子学生	15.8	5.0	6.5	2.2	0.0	%
男女合計	18.0	7.8	6.8	2.9	1.5	%

『日本のいじめ』被害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
20.4	16.4	14.2	12.9	9.0	%

2-3 いじめ加害経験（女子学生67人、男子学生139人）

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高 校	
女子学生	31.3	10.4	4.5	3.0	0.0	%
男子学生	38.8	15.1	11.5	7.9	5.0	%
男女合計	33.0	13.6	9.2	6.3	3.4	%

『日本のいじめ』加害経験

小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	
19.3	24.9	18.7	16.4	11.1	%

2-4 いじめ被害経験率（女子学生67人、男子学生139人）

	小学校	中学校	合 計	
女子学生	22.4	17.9	32.8	% (67人)
男子学生	15.8	7.9	18.0	% (139人)
男女計	18.0	11.2	22.8	% (206人)

『日本のいじめ』被害経験率

女 子		15.8	%
男 子		13.1	%
男女合計		13.9	%

2-5 いじめ加害経験率（女子学生67人、男子学生139人）

	小学校	中学校	合 計	
女子学生	31.3	11.9	38.8	% (67人)
男子学生	33.8	21.6	43.9	% (139人)
男女計	33.0	18.4	42.2	% (206人)

『日本のいじめ』加害経験率

女 子		17.5	%
男 子		18.4	%
男女合計		17.5	%

2-6 いじめ被害加害群（小学校）

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	7.5	14.9	16.4	% (67人)
男子学生	8.6	5.0	28.1	% (139人)
男女計	8.3	8.3	24.3	% (206人)

『日本のいじめ』被害経験率

男女合計	8.1	9.7	12.1	%
------	-----	-----	------	---

2-7 いじめ被害加害群（中学校）

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	10.4	7.5	4.5	% (67人)
男子学生	5.0	2.9	18.7	% (139人)
男女計	6.8	4.4	14.1	% (206人)

『日本のいじめ』被害経験率

男女合計	7.2	4.3	10.9	%
------	-----	-----	------	---

2-8 いじめ被害加害群（小学校～中学校）

	被害のみ	被害加害	加害のみ	
女子学生	10.4	22.4	16.4	% (67人)
男子学生	7.9	10.1	33.8	% (139人)
男女計	8.7	14.1	28.2	% (206人)

Table 3 校種別にみたいじめの手段 (1996・1997年度入学生)

3-1 いじめの手段・小学校 (女子学生51人、男子学生88人)

	無視	言葉	暴力	いたづら	その他	
女子学生	84.3	76.5	23.5	31.4	5.9	%
男子学生	70.5	70.5	15.9	29.5	2.3	%
男女計	75.5	72.7	18.7	30.2	3.6	%

3-2 いじめの手段・中学校 (女子学生45人、男子学生83人)

	無視	言葉	暴力	いたづら	その他	
女子学生	62.2	75.6	31.1	57.8	4.4	%
男子学生	47.0	72.3	37.3	33.7	0.0	%
男女計	52.3	73.4	35.2	42.2	1.6	%

3-3 いじめの手段・高校 (女子学生11人、男子学生18人)

	無視	言葉	暴力	いたづら	その他	
女子学生	63.6	63.6	0.0	27.3	9.1	%
男子学生	44.4	44.4	16.7	38.9	5.6	%
男女計	51.7	51.7	10.3	34.5	6.9	%

Table 4 校種別にみた学級担任の対応 (1996・1997年度入学生)

学級内 認知あり	担任は問題を取り上げたことがあるか				
	たいてい	～もある	ない	忘れた	
小学校	34.3	15.4	12.6	3.5	% (143人)
中学校	22.1	36.6	26.0	15.3	% (131人)
高校	3.8	13.2	62.3	20.8	% (53人)

Table 5 「いじめ」発生の現状認識 (1996・1997年度入学生)

	多い	少ない	分らない	
女子学生	74.6	3.0	22.4	% (67人)
男子学生	51.8	6.5	41.7	% (139人)
男女計	59.2	5.3	35.4	% (206人)

Table 6 今後のいじめ状況推移評価 (1996・1997年度入学生)

	増える	変化なし	減る	分らない	
女子学生	53.7	35.8	3.0	14.9	% (67人)
男子学生	33.8	43.9	3.6	43.9	% (139人)
男女計	37.9	41.3	3.4	41.3	% (206人)

Table 7 いじめ報道への関心度 (1996・1997年度入学生)

	極力得る	たまには	向かない	
女子学生	25.8	74.2	0.0	% (66人)
男子学生	25.0	71.2	3.8	% (132人)
男女計	25.3	72.2	2.5	% (198人)

Table 8 報道・情報への対応 (女子学生65人、男子学生132人)

	そのまま	極力保存	図書読む	話し合う	調べた	
女子学生	55.4	1.5	3.1	36.9	6.1	%
男子学生	71.2	2.3	1.5	23.5	3.0	%
男女計	66.0	2.0	2.0	27.9	4.1	%

Table 9 「いじめへの対応」正答率 (女学生66人、男学生129人)

	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	
女子学生	69.7	98.5	97.0	77.3	98.5	%
男子学生	83.7	95.3	96.9	79.1	100.0	%
男女計	79.0	96.4	96.9	78.5	99.5	%

(女子学生の57.6%、男子学生62.0%が全問正解)

じめ』調査と比べると、Table 2-6にある小学校段階では、加害のみ群が12%に対して24%と高く、これは28%という男子学生の多さによるものと思われる。この数字は1997年調査より若干高いものであった。一方、被害のみ群も被害加害群も女子学生の方が男子に比べてその割合が多い傾向は、本調査の中学校段階で1997年調査と同様であった。

### Q2「いじめがあった場合の手段」

Table 3は、いじめの手段について、いじめ学級内認知を報告した教職課程履修学生の結果をまとめたもので、その人数は表に記してある。それぞれの表にある手段の分類は以下のとおりである。「無視」＝仲間はずれにした、無視した。「言葉」＝悪口や言葉による。「暴力」＝殴る、蹴るなど暴力による。「いたづら」＝犯人不明のいたづら・いやがらせ。「その他」＝それ以外のもの。

小学校では「無視」「言葉」によるいじめが多く、男子学生の71%が回答し、女子学生は「無視」84%、「言葉」77%であった。「暴力」は男子学生の方が多く女子学生16%にたいして24%であった。また、中学生でも「言葉」73%、「無視」52%が多く、暴力は男子学生の方が若干多く37%であるが、女子学生も31%と多かった。小学校女子の「仲間はずれにしたり無視したりする」ことを中心とし「悪口や言葉による」いじめが目立ち、中学校でもそれを引き継ぐ形であるのに対して、男子も同様の傾向を示しながらも女子との違いということでは「暴力」とくに中学校での多さが特徴であった。「いたづら」も30～40%前後という数字で、いずれの手段も1997年調査より多くの学生が報告しているのは注意すべき点である。

### Q3「学級担任のいじめへの対応の有無」

Table 4は、学級内でいじめを認知していた学生に、学級担任が解決のためにいじめ問題をクラスで取り上げたかどうかを、「たいてい」＝たいてい取り上げた、「～もある」＝取り上げたこともある、「ない」＝取り上げたことはない、「忘れた」の4つの選択肢で回答してもらった結果を各学校段階別にまとめたものである。小学校では何らかのかたちで学級担任は対応したと回答している学生は50%で、1997年調査の70%に比べ大きく減少していたが、中学校では59%と1997年調査とほぼ同じ数字であった。

#### Q4「学級担任の問題解決のための対処方法」(略)

#### Q5「『いじめ』発生の現状認識」

Table 5は、現在のいじめの発生状況をどのようにに教職課程履修学生が評価しているかを問い、回答をまとめたものである。現在のいじめの状況を多いと認識している学生は52%（男子学生）から75%（女子学生）程度で、少ないと評価する学生は3~7%というものであった。1997年調査と比較すると、いじめは多いと評価する学生は若干少なく、それは男子学生が13ポイント少ないことによるもので、女子学生は若干であるが多くなっていた。そして、いじめは少ないとする学生は1997年調査に比べ5ポイントほど増えていた。

#### Q6「『いじめ』の今後の推移についての評価」

Table 6は、いじめの発生状況が今後どうなっていくと思うかを問うた結果である。「増える」とする学生は34%（男子学生）~54%（女子学生）で、減ると楽観的にみている学生は3%（女子学生）~4%（男子学生）にとどまる。「変化なし」と「増える」とを合わせると46%（女子学生）~66%（男子学生）となり、男女合計では1997年調査と同様に5分の4の学生がよい方向への変化を期待できないという評価をしていた。特に、女子学生の「増える」とするものは1997年の40%に比べ多かった。

#### Q7「『いじめ』問題報道への関心」

Table 7は、いじめ問題に関する報道への関心の程度を、「極力得る」=極力その記事を読んだり番組を視聴し情報を得るようにしている、「たまには」=たまにはその記事を読んだり番組を視聴し情報を得ることがある、「向かない」=ほとんどまたは全くそうした報道・情報には関心は向かない、の3選択肢からみたものである。積極的に報道等に関心を向け情報をえようとするものは25%、全く関心を向けないという学生は0~4%という極めて少数で、1997年調査とほぼ同程度であった。

#### Q8「『いじめ』問題の報道・情報の受け止め方」

Table 8は、いじめ問題の報道に接した場合の対応・受け止め方について、「そのまま」=報道・情報を受けたままにしている、「極力保存」=報道・情報を極力保存している、「図書読む」=教育雑誌や「いじめ」の図書など読むようにしている、「話し合う」=友人や知人と「いじめ」問題について話し合ったことがある、「調べた」=その他の方法

で「いじめ」問題を調べたことがある、という5選択肢（複数選択を含む）の回答をまとめたものである。男女合計の結果で見ると「情報を受けたままにしている」割合が66%（5ポイント減）で1977年調査とほぼ同程度であり、男子学生71%（5ポイント減）と女子学生55%で差があるのも同様であった。また、「友人などと話し合ったことがある」のは28%（5ポイント増）であったが、女子学生の方がよくこの問題を友人と話し合うようである（37%、6ポイント増）。

#### Q9「いじめに対する教師の対応の正誤」

Table 9は、「いじめ問題」への教師の対応についてその正誤を問うたものの正答率を記したものである。違いが目立ったのは、問題1「弱いものをいじめることは人間として絶対に許されない、という強い認識に立つこと」および問題4「いじめられている子どもの立場に立った親身の指導を行なうことが必要である」で、これらを正しい対応としない学生がそれぞれ20%程度おり、1997年調査の倍であった。この対応の正誤がケース・バイ・ケースであると考えたとしても注意すべき増加である。問題3「いじめはどの学校にもおこりうることなので常に対応できるようにしておく必要がある」、問題5「生徒が教師に相談しやすい関係を築いておかなくてはならない」、問題2「いじめがあるのではないかという意識を持っている子どもに悪い影響を与えるのでいじめについての問題意識は持たない方がよい」（誤とするのが正解）は、ほとんどの学生が正解であった。

#### Q1「中学・学級内『いじめ』認知」とQ5「『いじめ』発生の現状」とのクロス集計およびQ6「『いじめ』の今後の推移」とのクロス集計

Table 10-1からTable 10-6は、「中学時代の学級内『いじめ認知』」「中学時代のいじめ被害経験」「中学時代のいじめ加害経験」3質問と、「『いじめ』発生の状況認識」「今後の『いじめ』推移評価」2質問との間の、クロス集計結果および $\chi^2$ 検定結果（以下、 $\chi^2$ 検定結果と有意水準は表の下段に記した）を示すものである。1997年調査結果では、 $\chi^2$ 検定結果はいずれにも有意とはならなかったが、今回の結果では「中学時代のいじめ被害経験」と「今後の『いじめ』推移評価」との間に有意な傾向が認められた（Table 10-4）。

Table 10 学級内いじめ認知等と現状認識・推移評価

10-1 学級内(中学)×「いじめ」発生の現状

学級：中	多	い	少ない	分らない	
あった	58.7		5.6	35.7	% (126人)
なかった	60.0		5.0	35.0	% (80人)
合計	59.2		5.3	35.4	% (206人)

$\chi^2=0.0487$        $p=0.9760$

10-2 学級内(中学)×今後の「いじめ」推移

学級：中	増える	変化なし	減る	
あった	34.9	61.9	3.2	% (126人)
なかった	42.5	53.8	3.8	% (80人)
合計	37.9	58.7	3.4	% (206人)

$\chi^2=1.3441$        $p=0.5107$

10-3 被害経験(中学)×「いじめ」発生の現状

被害：中	多	い	少ない	分らない	
あった	54.2		12.5	33.3	% (24人)
なかった	59.5		4.4	35.7	% (182人)
合計	59.2		5.3	35.4	% (206人)

$\chi^2=2.7593$        $p=0.2517$

10-4 被害経験(中学)×今後の「いじめ」推移

被害：中	増える	変化なし	減る	
あった	58.3	41.7	0.0	% (24人)
なかった	35.2	61.0	3.8	% (182人)
合計	37.9	58.7	3.4	% (206人)

$\chi^2=5.2768$        $p=0.0715$

10-5 加害経験(中学)×「いじめ」発生の現状

加害：中	多	い	少ない	分らない	
あった	52.6		7.9	39.5	% (38人)
なかった	60.7		4.8	34.5	% (168人)
合計	59.2		5.3	35.4	% (206人)

$\chi^2=1.1257$        $p=0.5696$

10-6 加害経験(中学)×今後の「いじめ」推移

加害：中	増える	変化なし	減る	
あった	47.4	50.0	2.6	% (38人)
なかった	35.7	60.7	3.6	% (168人)
合計	37.9	58.7	3.4	% (206人)

$\chi^2=1.7979$        $p=0.4070$

10-7 被害経験×「いじめ」発生の現状

被害経験	多	い	少ない	分らない	
あった	62.0		8.0	30.0	% (50人)
なかった	58.3		4.5	37.2	% (156人)
合計	59.2		5.3	35.4	% (206人)

$\chi^2=1.5117$        $p=0.4696$

10-8 被害経験×今後の「いじめ」推移

被害経験	増える	変化なし	減る	
あった	56.0	44.0	0.0	% (50人)
なかった	32.1	63.5	4.5	% (156人)
合計	37.9	58.7	3.4	% (206人)

$\chi^2=10.4205$        $p=0.0005$

10-9 加害経験×「いじめ」発生の現状

加害経験	多	い	少ない	分らない	
あった	56.8		6.8	36.4	% (88人)
なかった	61.0		4.2	34.7	% (118人)
合計	59.2		5.3	35.4	% (206人)

$\chi^2=0.8161$        $p=0.6650$

10-10 加害経験×今後の「いじめ」推移

加害経験	増える	変化なし	減る	
あった	40.9	56.8	2.3	% (88人)
なかった	35.6	60.2	4.2	% (118人)
合計	37.9	58.7	3.4	% (206人)

$\chi^2=1.0451$        $p=0.5930$

Table 10-7および Table 10-8は、小学～中学時代を通じてのいじめ被害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および小～中いじめ被害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。ここでも1997年調査結果では有意な関連は認められなかったのに対して、本調査結果では「いじめ被害経験」と「今後の『いじめ』推移評価」との間に有意な関連が認められた (Table 10-8、 $\chi^2=10.4205$ 、 $p<0.0005$ )。

Table 10-9および Table 10-10は、小学～中学時代を通じてのいじめ加害経験と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および小～中いじめ加害経験と今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものである。1997年調査結果では、「いじめ」発生の状況認識との関連は認められなかったが、今後の「いじめ」推移の評価との関連に有意な傾向が認められ、加害経験のある学生の方が加害経験のない学生より、今後いじめが増えると推定していることが窺えたが、本調査結果では有意な関連は認められなかった。

Table 11は、中学校学級担任の対応と現在の「いじめ」発生の状況認識との関連、および今後の「いじめ」推移評価との関連とを調べたものであるが、1997年調査同様、中学校学級担任の対応と「いじめ」発生の状況認識および今後の推移評価との関連は認められなかった。

Table 12は、中学時代の学級内のいじめ認知、中学時代の被害経験、中学時代の加害経験、小学～中学を通じての被害経験および小学～中学を通じての加害経験それぞれと、「いじめ」報道・情報への関心度との関連を調べたものであるが、これらの中学時代のいじめ認知等も、1997年調査同様、「いじめ」報道・情報への関心度との関連は認められなかった。

Table 13は、小学～中学を通じての被害および加害経験者のいじめ情報を受けての対応を分析したものである。対応の5形態について、そうした対応をとると答えた学生(複数回答を含む)の割合を被害経験18人、加害経験58人を分母として算出した。全調査学生を対象としたものでは66%が「そのまま」(Table 8)で、Table 13のいじめ被害経験者、加害経験者の場合と同じで、1997年調査の70%ともほぼ同じであった。「話し合う」も全学生の

Table 11 中学担任の対応と現状認識・推移評価

11-1 中学担任対応×「いじめ」発生の現状

担任対応	多い	少ない	分らない	
あった	62.3	6.5	31.2	% (77人)
なかった	57.4	4.7	38.0	% (129人)
合計	59.2	5.3	35.4	% (206人)

$\chi^2=1.1400$        $p=0.5655$

11-2 中学担任対応×今後の「いじめ」推移

担任対応	増える	変化なし	減る	
あった	33.8	62.3	3.9	% (77人)
なかった	40.3	56.6	3.1	% (129人)
合計	37.9	58.7	3.4	% (206人)

$\chi^2=0.9064$        $p=0.5655$

Table 12 報道への関心といじめ認知等との関連

12-1 学級内(中学)×「いじめ」報道への関心

学級：中	極力	たまには	関心なし	
あった	24.6	69.8	5.6	% (126人)
なかった	23.8	68.8	7.5	% (80人)
合計	24.3	69.4	6.3	% (206人)

$\chi^2=0.3162$        $p=0.8538$

12-2 被害経験(中学)×「いじめ」報道への関心

被害：中	極力	たまには	関心なし	
あった	29.2	66.7	4.2	% (126人)
なかった	23.6	69.8	6.6	% (80人)
合計	24.3	69.4	6.3	% (206人)

$\chi^2=0.4956$        $p=0.7805$

12-3 加害経験(中学)×「いじめ」報道への関心

加害：中	極力	たまには	関心なし	
あった	23.7	68.4	7.9	% (38人)
なかった	24.4	69.6	6.0	% (168人)
合計	24.3	69.4	6.3	% (206人)

$\chi^2=0.1986$        $p=0.9055$

12-4 被害経験×「いじめ」報道への関心

被害経験	極力	たまには	関心なし	
あった	24.0	68.0	8.0	% (50人)
なかった	24.4	69.9	5.8	% (156人)
合計	24.3	69.4	6.3	% (206人)

$\chi^2=0.3197$        $p=0.8523$

12-5 加害経験×「いじめ」報道への関心

加害経験	極力	たまには	関心なし	
あった	20.5	70.5	9.1	% (88人)
なかった	27.1	68.6	4.2	% (118人)
合計	24.3	69.4	6.3	% (206人)

$\chi^2=2.8278$        $p=0.2432$

12-6 中学担任対応×「いじめ」報道への関心

担任対応	極力	たまには	関心なし	
あった	26.4	70.8	9.5	% (72人)
なかった	23.1	68.6	4.5	% (134人)
合計	24.3	69.4	6.3	% (206人)

$\chi^2=2.2777$        $p=0.3202$

Table 13 被害・加害経験と報道情報への対応との関連  
報道情報を受けての対応(被害学生18人、加害学生58人)

	そのまま	極力保存	図書読む	話し合う	調べた	
被害学生	64.6	0.0	4.2	37.5	6.3	%
加害学生	66.9	2.9	2.2	30.1	2.2	%
合計	66.3	2.2	2.7	32.1	3.3	%

28%に対して Table 13では32%で、ほぼ同程度の数字であった。また、1997年調査結果の29%とも近い数字であった。ただ、被害学生の「話し合う」と回答した割合は38%で加害学生を8ポイント上回り、1997年調査の24%よりも多い結果であった。しかし、被害学生と加害学生の差を $\chi^2$ 検定したところでは有意な差は認められなかった。なお、1997年調査で「図書を読む」としたものは被害学生では70%以上あり、加害学生の8%と大きく異なるものであったが、本調査では、被害学生、加害学生とも数%にとどまるもので、とくに被害学生の「図書を読む」学生数の違い、少なさが目立った。

## 2.4 考察

本調査が対象とした教職課程履修学生は1996・1997年度入学で、多くが1984・1985年小学校入学、1990・1991年中学校入学、1993・1994年高校入学と考えられる。1997年度入学生でみると、1980年代半ばから1990年代半ばまでが小学校後半から中学で、再びいじめが社会問題化する1995年は高校3年ないしは高校2年であった。こうした被調査者の学級内のいじめ認知率は、1995年度入学生(1997年調査)同様、小学校、中学校で高いものであった。また、1995～1997年度入学生の「いじめ学級内認知」等の年度間の変動では、1995年度入学生と後の2年間で「いじめ学級内認知率」はほぼ同じであったが、1996年度入学女子学生の中学3年時の学級内いじめ認知率は、前後の年度(約25%)と異なり、46.7%と大きな値を示していた。そこで、この点をひとまず置いて1996年度入学生(1998年調査)と1997年度入学生(1999年調査)のデータを合算して項目間の関連を調べてみたところ、1995年度入学生(1997年調査)とほぼ同様の結果となった。

まず、学級内いじめ認知であるが、中学時代の認知率は男女合計で1年41%、2年39%、3年35%と、1997年調査と同様、『日本のいじめ』調査の倍以上の認知率であった。男女差は1997年調査と若干の違いがあったが5～7%の違いであった。そして、いじめ被害経験も加害経験も1997年調査同様、『日本のいじめ』調査より低い数字であったが、女子学生の中学1年時13.4%の結果にあるように、女子学生の小学校から中学校1年にかけて若干高い被害経験が報告された点が特徴的であった。また、

いじめの手段や学級担任の対応については1997年調査と同様、男子の中学校での「暴力」および「いたずら」の多さが確認された。学級担任が何らかの対応をしたのは、小学校では1997年調査の70%に対して50%と少なく、それが何を意味するのか検討を要するが、中学校では60%と1997年度調査と同様であった。

いじめの現状認識では1997年調査と若干の違いがみられた。いじめは少ないとする学生が5%ほど増えていた。それは、被害経験の多かった女子学生では、いじめが多いとするものが1997年調査より若干多くなったが、いじめが多いとする男子学生が13ポイント減少したことによる。今後のいじめの推移評価についても、男女合計では約80%の学生がよい方向への変化を期待できず、特に女子学生の54%が今後増えると回答していた（1997年調査では40%）。これも被害経験の多さが影響しているのであろうか。

次に、いじめ問題の報道への関心等については1997年調査とほぼ同様であったが、その報道を受けての行動では、その結果および被害—加害経験等とのクロス集計結果から、1997年調査との違いが見出された。本調査結果では、いじめ問題の報道を受けて「図書を読む」学生が少なかったという点である。1997年調査では被害経験学生の73%が何らかの図書を読んでいたが、本調査では2つの入学年度で4%および2%にとどまり、1997年調査の加害経験学生の8%を下回るものであった。また、「話し合う」とした学生は、被害学生では1997年調査の24%に対して、今回38%となって加害学生を上回り、逆に、被害学生に8ポイントの差をつけて

いた加害学生では1997年調査とほぼ同じ30%であった。

以上、1996年度および1997年度入学学生の調査結果を考察したが、各年度間の違いをみるには被調査者数の問題がある。特に、女子学生数が少なく、1996年度入学生は30名の調査で、内17名が芸術系を専門とする学生であることも影響している可能性がある。しかし、全学生数でみるならば、その傾向を参考にできると思われる。この1990年代後半の3年間においても、多くの学生が学級内でいじめを認知していたと報告している。それは1980年代後半から1990年代前半を小学生および中学生として過ごした学生がいじめ認識であり、社会問題化された時期の子どもたちの体験を報告しているものだからである。そうした体験をどう転換・克服し、いじめ問題の課題探求と対応の展望をもつことができるか、それこそ経験を異にする学生間で話し合うことが必要なのである。

### 3. おわりに

現在では、いじめ問題が日本のみの問題ではなく、世界各国の問題でもあることが知らされ、また、社会学的な比較研究もされるようになった。残念ながら、このいじめ問題は繰り返し考えなければならぬ問題なのかも知れない。学生たちの否定的な推移予測も、選択肢で問われた場合の回答であろう。そこでの否定的な評価の次には、そこから何が教育課題かを見出すことが求められる。そうした課題を意識しつつ、さらなる分析を続けたい。

### 引用文献・注

- [1] 森住宜司, 教職課程履修学生のいじめ問題経験と現在の状況認識, 「総合福祉」, 第1号, p. 93-101, 2004年
- [2] 島田啓二, 「いじめ」の克服と教員養成, 「生活指導研究」, 4, p.137, 1987年
- [3] 調査項目のうち Q1~Q4および Q7と Q8については前掲島田論文の質問項目を参考に字句上の改訂をして用いた。また、Q9は雑誌「教

- 職課程」1996年8月号掲載のものである。ほぼ同じ調査が1995年・1996年に実施され、その結果は次の論文等にまとめられている。森住宜司, いじめ問題に関する新聞社説と教職課程履修学生の関心, 「浦和論叢」, 第17号, p. 391-410, 1997年
- [4] 森田洋司他編, 『日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集』, 金子書房, 1999年



### Abstract

The purpose of this paper is to examine the students' views on school bullying problem. The data of the students of a teaching profession course were analyzed and compared with the data of Morizumi's report (2004) that were researched in 1997. 60% (70% in the 1997 research) of the students think that the incidence of school bullying is high rate in the present elementary schools and junior-high schools. 40% of the students also think that the incidence of school bullying keeps high or that the rate of school bullying increases in the future. No relationship between the awareness of bullying behaviors and their interests in the news of bullying was found as well as in Morizumi's report (2004). There are also some differences between the bullies and the victims as well as in 1997 research.

**Key Words:** school bullying, teaching profession course, student awareness, bully/victim experience, estimation of fluctuation